

成し遂げる力を支えるもの

ノンフィクション作家

伴田 薫



▲ 18年度版「国語」3「炎を見る—赤き城の伝説」

人物の取材をしていて、しばしば考えることがありますが、それは、「成功」という言葉の意味です。

広辞苑には、【目的を達成すること。事業などをなすとげること。転じて、地位や富を得ること】とあります。この解釈に異を唱えるつもりは毛頭ありませんが、「目的を達成すること」と「地位や富を得ること」とは必ずしも同義ではないと思えます。

「炎を見る」赤き城の伝説」で描いた、奥原崇典さんの未知なる瓦への取り組みは、首里城復元という難事業にとつて不可欠な仕事でした。そして、奥原さんが焼いた赤瓦は、よみがえった首里城をいまも沖縄の風雨から守り続けています。

しかし、難題に挑戦し、それを成し遂げた奥原さんは、地位を与えられたわけでもなく、富を手にもすることもありませんでした。むしろ、瓦を焼くために多額の借金を背負ったこととなった奥原さんの仕事は、ビジネスモデルの一例としてとらえれば、無謀な試みと評価されてしまいかもかもしれません。

実際に、奥原さん自身も、当初は必ずやり遂げられるという確信はもっていませんでした。それでも、技術的な苦労や経済的な負担を覚悟のうえで、あえて挑戦したところに、奥原さんの仕事の尊さがあるように感じます。困難な問題に立ち向かうとき、動機づけとなる要素はいろいろあると思います。「地位や富を得ること」が、その要素と成り得ることも否定はしません。しかし、人が全身全霊を傾けてものごとを成し遂げようとするとき、情熱の源となるものは、自分自身が受けるであろう

損得を超越したところに存在しているような気がします。

地位や富によって決して揺らぐことのない情熱の源それを「夢」や「誇り」という言葉に置き換えることができるのではないだろうか。

首里城の復元には、奥原さん以外にも、多くの人たちが夢と誇りをかけて取り組みました。沖縄県下では、「首里城の復元なくして沖縄の戦後は終わらない。」という声も上がりました。その意味では、このプロジェクトには沖縄の人々の夢や誇りまでもが託されていたと思えます。

そして、難題は瓦だけではありませんでした。城の内部の構造、柱や壁の材料、さらに使われていた赤い塗料の種類など、いくつもの謎がありました。それらを一つ一つ解き明かすことができたのは、復元事業に情熱を注いだ人たちの地道な努力にほかなりません。

プロジェクトのキーマンの一人に、高良倉吉さんという琉球史の研究者がいます。膨大な古文書を調べ上げ、幻の城の全容解明に尽力した高良さんは、首里城復元の意義を、こう話していました。

「戦争で失われた沖縄の人の命は取り戻せないけれども、琉球王朝時代の首里城を復元できれば、沖縄の魂は取り戻せるんじゃないかと思っただけです。それに、沖縄にはこれだけ豊かな歴史と文化があったということを入々に伝えようとした場合、僕が三百六十五日死に物狂いで講演をして、月に一冊のペースで本を書いて訴えたとしても、本物の首里城が沖縄にある」という現実がも

つ説得力には絶対に勝てないんです。」

単に知識や情報を伝えるだけであってはならない、受け取る者の興味を刺激し、伝えるべきことを実感してもらうことが大切だという高良さんの考え方は、教育にも通じるものではないかと思えます。

わたし自身、「炎を見る 赤き城の伝説」の出版となった『プロジェクトX 挑戦者たち』（NHK出版）の書籍化の仕事に携わり、首里城復元のドラマを担当する半年前に、偶然にも沖縄を旅する機会があり、復元された首里城を初めて目の当たりにしました。荘厳さの中にも華やかさを湛えた赤い城の存在感は圧巻でした。思い起こせば、そのときに抱いた鮮烈な印象が、原稿執筆の際に大きな力となったように感じます。

伴田 薫（はんだ かおる）

一九六三年生まれ。人物をテーマにした取材・執筆活動に携わり、神と呼ばれた男たち（熱き男たち）青春出版社「Big Tomorrow」掲載）などの文章がある。平成18年度版国語教科書に掲載される「炎を見る 赤き城の伝説」は、プロジェクトX 挑戦者たち13 願いよ届け 運命の大勝負（NHK出版）に収録された「炎を見る 赤き城の伝説 首里城・執念の親子瓦」に、筆者が加筆したもの。